

学びの配慮 すべての子に

1人1台の時代 自分らしい方法で

読み書きが苦手など、学びに困難を抱える子はどう学習し、進学の壁をどう乗り越えればいいのか。オンラインイベント「凸凹のある子の未来を輝かせよう」GIGA時代だからできる進学と学び（朝日新聞社主催）が4日に開かれた。専門家6人と、代読などの配慮を受けて受験した高校生・大学生3人が登壇。インクルーシブ教育が叫ばれる「1人1台端末の時代」だからこそその学びを語り合った。

学びと進学 オンラインイベント

朝日新聞東京版の連載（学研教育みらい）として「凸凹の輝く教育」が「学書籍化されたことを受けて」に凸凹のある子が輝く開かれた。

凸凹のある子の未来を輝かせよう

～GIGA時代だからできる進学と学び～

第1部 「進学」の壁 デジタル活用でどう乗り越える

コーディネーター:朝日新聞編集委員 宮坂麻子

今年の大学入学共通テストで、障害などで配慮を受けた人は約3千人。端末使用が認められた例は、毎年数件程度。CBTは研究しているが、50万人の一斉実施とは相性がよくない。個人的には、一部なら可能かもしれないと思う



大学入試センター試験・研究統括官 大津起夫さん



英国では、試験センターで集約的に受験できる。日本でも担当者を集めて集約的に受けるシステムはできないか。障害者差別解消法で合理的配慮が義務づけられたが、配慮を求める根拠資料をそろえる支援態勢に限られることが大きな課題

東京大学先端科学技術研究センター准教授 近藤武夫さん

GIGAスクール構想が始まったのに、(制限が多く)端末を自分の筆記用具として、使いやすいように自由に使えないことが気になっている。学校と保護者は対立構造ではない。合理的配慮を子どもたちが負担なく言い出せる環境を整えて欲しい



一般社団法人「読み書き配慮」代表 菊田史子さん

第2部 凸凹のある子が輝く未来、学校から飛び出す学び

周りの人と同じことを求め、個人が変わることを求めるのがいまの社会。いつまで受験の合理的配慮と言い続けるのか。子どもはみな同じじゃない。同じことを前提にした教育からの転換が必要



東京大学先端科学技術研究センター教授 中邑賢龍さん

第3部 凸凹のある子の学習指導 デジタル機器どう使う?

分科会1 どう指導する?

コーディネーター:朝日新聞編集委員 宮坂麻子

学校が「そんなのできない」を積み重ねる場になっていない? その子「だけ」に努力を強要する時間はない? ICTなど方法は「武器」。自分にあった武器選びができるようにして大丈夫という自信をつけて社会へ送り出したい



鳥根県安来市立荒島小学校教諭 井上貴子さん



米国では、「何かをしてあげる」ではなく学びの権利保障が基盤。合理的配慮は子どもの権利。通常学級で何が出来るかを考えるインクルージョンが基本になっている。教えやすさよりも学びやすさを優先することが大切

ニューヨーク州学校心理士 パーンズ亀山静子さん

分科会2 どう求めていけば? 経験者に聞く

コーディネーター:朝日新聞東京本社 社会部記者 川口敦子

文字を書くことが苦手で、中高はノートテイクはiPad、定期試験は学校のパソコンで受けた。ICT教育が盛んな高校でも、入試でパソコン活用となると認めてくれない。説明会などで端末を見せて、自分で必要性を説明することが大切



私立高校1年 あまねさん



国立大学2年 こうきさん

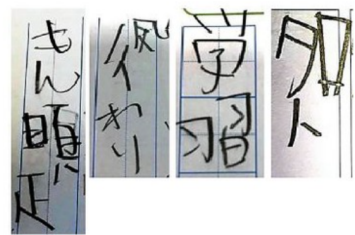
読み書きが苦手で、中高の定期試験は、別室や時間延長、計算機使用も認められた。模試は配慮がなく合格判定できず困った。大学入試センター試験は全教科代読が認められたが、事前打ち合わせが重要と痛感した



私立大学2年 いっせいさん

読み書きが苦手で、中高ともノートテイクは端末。機械での音声読み上げも活用した。大学では、課題や試験もパソコン。教員に自分の特性を理解してもらうと同時に、配慮できない事情も理解し、面談を繰り返すことが大切

務める大津起夫さんが、障害のある受験生への大学入学共通テストでの配慮の現状と申請方法を説明。今年1月も延べ約6300件の配慮を認め、端末使用を認めた例は年間数件しかないという。東大先端科学技術研究センターの近藤武夫准教授は、米国や英国では障害のある大学生が全学生の2割ほどで、その半数近くが発達障害であるのに対し、日本の大学ではまだ1%程度しかない」と説明。ただ、障害者差別解消法施行以降、急激に増えており、子ども的人格形成といえども、個人を殺し、社会の求めに行われているのか。子どもは、発達障害の子の学習支援に詳しい鳥根県安来市立



書字障害の子が書いた文字。パーツは合っているが形が整わない。イベント発表資料から

めめる人材を養成する教育になっていないか」と投げかけた。第3部の分科会の一つで、発達障害の子の学習支援に詳しい鳥根県安来市立

荒島小学校の井上貴子教諭が、様々なアプリを紹介。学校で子ども1人に1台ずつ端末を配る「GIGAスクール構想」が始まってからの状況にも触れ、みんなと同じ端末、同じ使い方ではなく、その子に必要な形で使える環境にして欲しいと訴えた。米ニューヨーク州学校心理士のパーンズ亀山静子さんも米国から登壇し、インクルーシブ教育の現状を報告した。「米国では子どもの権利保障が基盤。学校でその子に必要なことをアセスメントし、納税者に支援理由を説明する責任がある」と制度を説明した。もう一つの分科会では、読み書きに困難を抱える3人が、試験などで受けた配慮の経験を語った。私立高校1年のあまねさんは「先生たちもよくわかっていないので、自分で説明できることが重要になる」。私立大学2年のいっせいさんは「大学入学後に受けた配慮なども説明。面談を繰り返して」とした。国立大学2年のこうきさんは、「みんなが苦労せず十分な配慮をもらえる社会に変わって欲しい」とした。(編集委員・宮坂麻子)

◆このイベントのアーカイブ動画は、12月14日～来年1月31日まで期間限定で、朝日新聞のサイト寺子屋朝日 (<https://terakoya.asahi.com/category/forteachers>) で、ご覧いただけます。